
Burn the blood! ~ **その血を燃やせ!** ~

蜜柑 汁洲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Burn the blood! 〜その血を燃やせ!〜

【Nコード】

N7462Y

【作者名】

蜜柑 汁洲

【あらすじ】

『+ BURNING BLOOD +』よりタイトル変更

物語の舞台となるのは、今より十数年…或いは数十年後の地球です。宇宙から飛来してきた隕石によって地球上は大混乱。

なんとか未曾有の大災害から復興を果たそうという時にそれは起こりました。

隕石より漏れ始めた放射能。

汚染され始めた世界。

そして……影響を受け始めた生き物たち。

荒廃しかけた世界で力を手にいく抜くのは誰だ！

／／

とまあ色々上で書いたわけですが、ダーク有り、シリアス有り、コメディたまにしか無し、の基本的に『熱い』展開のモノにしていきたいなあと思っています。

最近の流行りは、日常生活に目を向けたほのぼのとしたものや、カッコよさを追求したモノが多いような気がします。

泥にまみれて、涙に濡れて、血反吐を吐くような泥臭い『熱さ』があつたっていいんじゃないでしょうか？

私にそれほどの文才があるかどうかは分かりません。

つたない文章ですががんばってみます

物語の舞台となるのは、今より十数年…或いは数十年後の地球。時間という大樹から枝葉のように無数に分かれて伸びていく未来の中の一つ。

人類滅亡の危機に瀕し、多くの人々が遠く届かない憧れを抱いていた超能力を持ってしまつと人々は何を成すのか。

超能力を希望と慈愛に溢れた人類再興への光の道しるべとするのか。はたまた

超能力を絶望と怒りに満ちた人類滅亡の崖道への片道キップとするのか。

幻想の中の決して届かないと思われた力を手にした時、人類はどんな方向へ歩み始めるのか。

これはそんなifの物語……

はい！とまあまずはさておき第0話ですよ、皆様。

初めての方も初めてじゃない方もこんにちは、いらっしやいませ、よろしく願います。

作者の蜜柑^{ミカン} 汁洲^{ジウス}と申します。

えー私の自己紹介といいますが、今後の更新頻度のことと先に言い訳をさせていただきたいのですが、私は現在専門学校生です。

課題が忙しかったりするので更新は不定期まつたり更新になると思うのですが、無理しない程度にはがんばります。

さてさて、諸注意なんですけど…まあ→のあらすじを読んだだけじゃないじゃこりゃー！って思う方ばかりですよー！。

ククク、計算通り（ニヤツ というのは実にどうでもいいことで、実際はちよつとでも興味を引いて中を見ていただければなあと

いうあざとい思考によるものです。
なので、今ここまで読み進めているアナタはまず私に引っかけた
ということになります、感謝感謝です。

で、肝心な内容なんです、まず一番重要な設定が隕石が地球に落
つこちた！というものです。

単純ですが、ここがこの話のキモになるので抑えておいてほしいで
す。

あとはそこから話が広がっていくのでそこさえ押さえてもらえれば
なんとかなるかと思います。

これ以上はちょっとお話しすることは出来ないので、これはこの辺
で。

視点の方は基本的に第三者視点でいこうと思っています。

ただ、作中でAルートを進む方とBルートを進む方で切り替えを
する予定です。

切り替えをして投稿する時はサブタイにその旨を書くのでよろしく
おねがいします。

今の段階ではとくにこれといった諸注意は無いので、これにて第0
話をメらせていただきますが、このページの変更が行われた時は最
新話のあとがきに変更の旨を記載しておきます。

それでは皆様ごゆるりと気楽に読み進めていって下され〜♪

001 プロローグ

現在、地球は異常気象や動物の突然変異、絶滅、生態系の変化などの問題に追われていた。

今まで何十年にも渡って調査してきていた地球に関するデータなどは意味をなさなくなることもしばしばであった。

科学者たちは現在の状況を解明しようと大忙しで駆け回り、政治家たちは国民の混乱を防ぐために様々な政策を発表したりして奮闘していた。

そしてそれは世界各国のどのような場所でも行われていた。

この混乱の原因を全ての元へと辿っていくと、一つの大事件につきあたることとなる。

それが俗に『隕石漂着』と言われるものだった。

この『隕石漂着』を最も早く予期していたのはNASA航空宇宙局の科学者たちだった。

予期していたと言っても、実際はNASAの科学者たちが予期していたのは小惑星との衝突による地球全域を巻き込んだ地球滅亡であって、厳密に言くと『隕石漂着』のことではなかった。

しかし、もちろん隕石が地球に来て、人類に大規模な損害をもたらしたのは言うまでもないことだ。

隕石漂着による余波で大津波や、プレートの変形による地震が頻発するようになり、二次、三次などを合わせた様々な災害によって人類の約5分の3が犠牲になった。

それでも、隕石の落下による地球の瓦解などの地球滅亡の危機は起きなかったし、何百メートルもあるような超巨大津波で世界が沈むことはなかった。

どういうことか、その隕石は軽石みたいに中がスカス力になっており、一見した見た目よりも質量はかなり軽く、落下地点が海だった

ために落下の威力が津波となつて落下時の衝撃を分散したおかげで被害が地球滅亡レベルまでに及ぶということは無かった。

もちろん落下地点の近くに住んでいた人々には津波などで甚大な被害が出たので、手放しに喜べる状況では無かったのは確かだった。

そして、驚くべきことにその隕石は衝突による衝撃で海底山と結びつき、新しい島を形成した。

『カラミティアイランド』と呼ばれるようになったその新しい島は、それから特に動きを見せることも無く地球の一部として馴染んでいった。

しかし、それらよりももっと凶悪な、全世界に被害をもたらすようなものがその隕石にはあった。

それが放射性物質『アビリタイト』と後に呼ばれるようになる、濁ったエメラルドのような輝きを発する物質だった。

地球のどの物質にも当てはまらないそれは、その放射性物質がもつある特性から取って後の世でそうよばれるようになったが、落下当初は『災いのもと』『死の岩』『不幸の結晶』などと呼ばれて恐れられた。

隕石の落下によつて、そこから海に流れ出したその放射能は海流に乗つて、または風に乗つて全世界へと散つていき、世界各地に放射能をまき散らした。

そのため全世界では人間に限らず、生物であれば奇形や、突然変異などを起こしてしまい、もともと少なかった動物達の一部は絶滅したり、変化したせいで生態系の変化が起こつてしまつたりと、急激な生態系の変化が起きた。

人間も放射能の影響を受けたために発癌、急性白血病、白内障などの被害を受け、生まれてくる子どもたちは奇形児だつたり、精神障害を持っていたりもした。

これらが世界各国で起こつてしまったため、各国はこの人類に対する危機のために洪々ながらも手を取り合い、資源や機材を出し合つて除線をしたり、『カラミティアイランド』を中心とする放射能遮

断のためのドーム型の隔壁のようなものを作るなどの対策をとった。このドームのお陰で放射能は漏れなくなり人類は助かったものの、隕石の周りは人が住むことが不可能なほど汚染されたので一般人立ち入り禁止として、上空を旅客機が飛ぶことも禁止した。

ドームに囲まれたカラミティ島の管理は、宇宙からの未知の物質を狙って各国が欲しがるせいで所有権を決めることができないために、各国の混成チームが編成されて管理をすることになった。

そうして、人類は多大なる被害を受けながらも時間をかけて再び立ち上がることになんとか成功していった。

時間は少々かかったがこれで元の生活に戻れると思い、それぞれが元の生活へと戻っていく時だった。

事件から7年たった冬の夜、隕石漂着のせいで人口が激減し、第二アメリカ合衆国として再生した旧ニューヨークにある寂れたデパートで、人質立てこもり事件が起こった。

犯人によって人質としてとらえられたのは32歳の母と11歳の男児で、その二人は休日買い物にきていただけの平凡な家族の一員だった。

父親も二人とともにデパートへ来ていたが少ない物資を多く集めるために別行動をしており、何が何やら分からないうちに避難をさせられた時には、既に二人は人質としてとらえられていた。

そして視聴者がほとんどいなくなり一局しか映らなくなったTVでは、警察による交渉の失敗、狙撃チームによる犯人狙撃作戦の実行の様子をリアルタイムで報道していた。

警察の狙撃犯チームの中でも最も優秀な狙撃手によって、銃口からマズルフラッシュとともに飛び出した弾丸は寸分の狂いもなく犯人の頭部を貫通し、一瞬で意識を刈り取った。

しかし、犯人が倒れていくときにトリガーに指が引っ掛かったままだったのか、母親のこめかみに突き付けられていた銃は跳ね上がりながらトリガーを引かれ、母親の即頭部に銃弾を撃ち込んだ。

犯人に次いでその場に崩れ去る母親を見た少年は、愕然とした面持ちで母親の死に顔を見つめ、そして理解をしたときに悲痛な叫び声を分厚い雲がたちこめる空に放った。

テレビの向こう側にいる数少ない人も、現場にいた様々な立場の人も、そして少年の父親も視線を落として、涙をこらえた。

そして、それから初めに異変に気付いたのは現場の警察官だった。いつまでもただただじっとしているわけには行かないと思ったのか、少年のところに行つて、安全な場所まで連れて行こうと近くまで駆け寄ったその時に、警官は叫んでいた少年がいつのまにか俯きながらボソボソと何か声を発していることに気付いた。

一体なにごとだろうと訝しんだ警察官だったが、母親が目の前で死んだなら受け入れがたいこともあるだろうと思い納得して、そのまま駆け寄つて少年を連れて行こうと少年の手をとった。

しかし、その警官の体が突如として灼熱の炎に包まれて一瞬のうちに消し炭となった。

あまりの突然の展開に全ての人が呆然とする中で少年の体も、周りの空気さえも焦がす灼熱の炎で包まれていく。

一際大きな炎に包まれ、熱風をあたりにまき散らしたかと思うと、その少年は炎の中で言葉にならない怨嗟の声で吠え、近くにいた警官隊の中へと飛び込んだ。

高温の炎に焼かれて次々と消し済みになっていく警察官たちは、炎の奥にちらちらと見え隠れする少年の姿に撃つことを一瞬躊躇い、その間に炎に身を焼かれていった。

少年の父親はまわりの制止をふりほどいて、少年をなんとか止めようと近づいたが、その手は無情にも少年に届く前に炭と化し、地面へ崩れ去っていった。

報道を見ていた人々は愕然とし、あるいは呆然としてニュースを食い入るようにつめていた。

そして、ニュースは機材が熱にやられて壊れるまで続き、その少年の暴れる様が米国全土にあますことなく伝えられた。

その後散々暴れまわった少年は力を使いきったのか、糸が切れたかのように唐突にその場に倒れこみ、すぐさま特殊部隊の手によって拘束され、強力な睡眠薬を打たれた上で連行された。

旧ニューヨークの街の一角は戦場になったように焼け焦げ、壊れたがすぐにあたり一帯が封鎖されることになり、報道関係者の接近も許されない一切立ち入ることが出来ない厳戒態勢がしかれた。

報道番組では先ほどまで写されていた映像を元に専門家などを電話するなどをして、さきほどまでの映像の解析を進めていたが、そのどれもが宇宙人や、合成映像などと様々な憶測を飛ばせていた。

一方そのころ、件の少年を保護：拘束した特殊部隊の面々は、頭にハテナマークを浮かべながら何故即時射殺をしなかったのだろうかと思っていた。

通常ならば警官を何人も殺してしまうと即時射殺命令が下されるはずなのだ。

しかし、上官の『生かしたまま連行せよ』という命令は絶対だとし、今は眠れる少年の様子をこわごわとみていた。

少年の寝顔は年相応のあどけないもので、強力な睡眠剤を打たれたせいでピクリとも動かないその様は一見死んでいるようにも見える。しかし、その実態は不可思議な能力を使って現場にいた警察官を皆殺しにした凶悪な犯人。

少年の様子を監視している特殊部隊の人間は恐怖をおぼえることはあっても、少年にかわいらしさを覚えることは無かった。

その後、さらなる上官の命令で行き先を変更した車は、秘密の通路を使って軍の秘密研究所：通称：SSRF（Seventh Secret Research Facility）と呼ばれる『第七秘密研究施設』へと向かう。

施設に着いた隊員は少年を厳重に拘束したまま車から降ろすと、救急で患者を運ぶような台車の上に拘束具を取り付けたものに少年を拘束しなおして研究所の中へと運びこんだ。

隊員に課せられた仕事はここまでで、その後の少年のことは施設に

いる研究員に引き継がれる。

少年の意識が戻ったあとは研究員によってしばらく尋問が続き、そして初めこそ人道的な少年の意思による協力の研究が進められていたが、次第に研究は苛烈していき、最終的には少年の意思を無視した非人道的な研究が進められていくことになる。

研究員たちにとってはその少年はもはや興味深い研究対象としか目に映らなくなり、両親も既に死んだ少年は引き取り手のいない都合のいいモルモットでしかなかった。

そして非人道的な研究が積み重なった結果、拷問にも似た研究が終わることを望んでただただ我慢していた少年はついに自分の舌を噛み切って死んだ。

研究員たちがその様子を見て最初に言ったのは「しまった。自殺防止用に轡でもかませておくんだった。生きた貴重な素材がなくなってしまった」であった。

研究結果が整えられ、SSRFからあがってきた極秘報告書を読んだ当時の大統領は、全米生中継によって全国民の知ることとなった事件の真相を公表することを決定した。

その日、大統領は「現在、世界には超能力と呼ばれるような力を使う、いわゆる『能力者』が現実的な脅威として存在します。」と、全世界へと『能力者』というものの存在を公表した。

その日から『アビリター』と呼ばれる能力者達の地獄の日々が始まった。

001 プロローグ（後書き）

つと、まずは導入部分のプロローグでございます。色々と設定が出てきているので、ココをある程度抑えておいてくれれば後の話がスムーズになると思います。

あ、それと、誤字指摘、質問などは感想欄に書いていただければ修正、返信するつもりですが、批判的な意見だったり、明らかな荒らしとみなした場合は削除したりもします。

002 Contaminated World

アカシバゴウキ
赤司波剛毅は、両親を生まれてから直ぐに失うことになった孤児の一人だった。

隕石漂着のために父と母が多量に放射能を被ばくし、そのせいで患った癌のために剛毅が3歳の誕生日を迎える直前に死を迎えることとなった。

両親は幼い剛毅を残して死ぬことに涙を流しながら悔み、剛毅のその後の成長を親戚に託した。

しかし、その親戚は最初こそ普通に育てていたものの、自分の子供でもない剛毅を育てていくことに次第にストレスを覚え始め、剛毅が11歳になった時に剛毅を連れて海外旅行に行き、僅かなお金と食料を持たせてそのままおきざりにして帰った。

当時は隕石漂着の影響があとを引く食料不足や、失職による貧困で、子供を捨てるということは珍しくなく、一応国が禁止をしているものの後が絶たなかった。

経済の結びつきが強かった国との交通は比較的早く安定し、渡航料金も国家間の経済復興のために震災特別料金で通常よりも安めに設定されていたのもその一因だったのかもしれない。

国内にそのまま捨てられることも多かったが、国が負担する養育費用削減のため震災孤児の親を見つける方針がとられており、捨てたとしても親のもとに帰ってくるが多かったのも海外に捨てられる要因になった一部だろうと考えられる。

かくして11歳という幼さで海外に一人捨てられた剛毅は、容赦のない厳しい環境の中で砂と埃にまみれて育っていくことになった。

そして見知らぬ土地に捨てられてから1年が経ち、当初持っていたお金もつくに全て使い果たした剛毅は子供なので当然働くことも出来ず、空腹も限界に近付いていたこともあってホテルの裏手で自分と同じような子供が、廃棄された食べ物の袋を漁っているのを見てふらふらと近づいていった。

「どっかいけ！これは俺のだ！それ以上近づくならブツ殺してやる」

相手の少年は、自分と同じような子供が近づいてきたのを見て、自分の貴重な食料が奪われると思ったのか、刃が錆びついたカッターを取り出して剛毅に威嚇してくる。

その少年の剣幕を見て気圧された剛毅はそのまま後ずさり、背を向けて歩いてきた通路を走って引き返した。

しかし、その走りも空腹のために次第に力を無くしていき、剛毅は薄汚れた裏路地の壁に手について力なく息を吐き出す。

このまま何も食べられずに飢えて死ぬのだろうか…と考えた剛毅の背後から細長く伸びた影が差した。

いきなり差した影に何だろうと思いつつもそちらへゆつくりと目を向けると、路地の入口で片手に缶づめが入った袋を持った少年が立っていた。

その少年は、剛毅の痩せた体とやつれた表情を見るとおもむろに剛毅の方へと近づいていき、袋の中から缶詰めを取り出すと缶のふたをあけて剛毅に手渡した。

「腹へってんだろ、お前。コレ食えよ」

剛毅はもらった缶詰めと少年の顔を交互に見たあと、空腹に耐えかねて缶詰めにがつついた。

S P A M 缶の油っこくて濃い味が口の中に広がると、空腹だった剛毅はそれだけで幸福をかみしめているように思え、もつと食べたいと思って缶の中に残っていた残りの肉を直ぐにペロリと平らげた。

「良い食いつぷりだな、お前。それにお前……。ん、いや……まあいいか。……よし、気にいった。こんなところにいたってことは、どうせ一人で行くところもないんだろ？ ついてこいよ、ここよりは多少はマシなところにつれてってやる」

そういった少年はくるりと剛毅に背を向けて路地の奥の方へと歩き出す。

ここよりも多少はマシな場所があると聞いた剛毅は、自分に背を向けてさっさと歩いていく少年の後を追うようにふらふらとついていった。

「帰ったぞ、皆。今日は一人新人を拾ってきたんだ。皆仲良くしてやってくれ」

路地の奥へと進んでいった少年は、工場跡地のようなところへ破れた金網の隙間を通って入っていき、錆びついたドアを音を立てながら開いた。

ドアの向こうから剛毅の目に飛び込んできたのは自分と同じぐらいの年に見える少年や少女3人ほどが室内で遊んでいる光景だった。

「ギルバート今日はちょっと遅かったねー。また寄り道してたのー

「？」

「いや、話きてたか？ユリア。今日は新人を一人連れ帰ったんだって今言っただろ」

「そつかそつかー。あれ？そっちの子は誰？」

「だから！俺が連れ帰ったんだよ！」

「あははー、ごめんねー」

「ぐう…いつもどおりマイペースな奴め…」

剛毅の前でたった今起こった寸劇によると、剛毅を連れてきた少年がギルバートというらしく、ギルバートの姿を見て駆け寄ってきて話をしていた天然がはいった少女がユリアという名前の持ち主だということが分かる。

ユリアはこの工場跡地にすることが場違いな様な、キレイに整えられた明るいブラウンヘアの少女で、顔は可愛らしく、万人に愛されるような笑顔を持つ子だった。

「遅いわよ、ギルバート！あんたが寄り道する癖があるのは分かるけど、最近はアビリター狩りが行われてるって噂なんだから……。ただでさえあの事件の子と同じ年の子は怪しいって思われてるのに……」

「わかってる、シェイラ。わざわざ心配かけて悪かったな」

遅れてやってきたのは磨けば光るだろうが、汚れなどでくすんだブロードヘアをポニーテールにしている活発そうな少女だったが、

今は少しだけ心配だという雰囲気がいじみ出ている。

「！心配なんかしてないわよ！あんたが連れていかれたら食料がなくなるから言っただけよ！」

照れ隠しにガツと見事なボディブローを決めたシェイラという少女はちよつと離れた位置にあった壊れかけのソファにムスツとした雰囲気腰掛けた。

「グツ……。いいボディブロー……。だツ……。！」

「いい加減学習したらどうだ。お前もシェイラの気持ちには気づいているんだろに……。！」

「お、ティードか。いやいや、ああいう反応をするのがまたアイツの可愛いところであってだな……。！」

「俺としてはいちいちサンドバックになるまでの意味が見出せないな……。！」

シェイラの綺麗に決まったボディブローを受けて膝をついたギルバートの横では、いつのまにか来ていたティードという少年があきれた感じでギルバートと話をしていた。

ティードは黒髪で端正な顔の中に切れ長の目を持った少年で、どことなく近づきたいような雰囲気を感じている節があった。

ティードは、やれやれ……といった感じで肩をすくめて壁の方へ歩いていくと、壁に背中を預けて寄りかかると腕を組んで目を瞑った。

自分のことを置いてきぼりで次々と進んでいく展開に、さすがの剛毅も口を開こうとするとそれを察したのかギルバートが先に声を上

げた。

「おっと、悪い悪い。さてさて話の本題だが、今日は面白そうな子を一人見つけたので連れてきた。たぶん今日からここに住むから皆よろしくな」

パンパンと2回手をたたいたギルバートは注目を集めたのを周りを見わたして確認してから口を開き、とても軽い口調でさらりと剛毅の今後にもかかわることを発表した。

「ええ！？ちよつと！いくらなんでもイキナリすぎるでしょ！なんとなく想像はできてたけど……！」

「……。ギルバートが面白そう……。かなるほどな……」

「わあゝよろしくね。新しい能力者さんだね」

「お！ユリアがそういうってことはやっぱりアビリターだったかー！連れてきて正解だったな！」

「ええ！？ちよつとアビリターってどういうことよ！？」

一人状況を理解していないシェイラが驚きの声をあげるが、他の3人はと言えばやっぱりそうだったかーという反応であり、シェイラだけが理解が追い付いていない状況だ。

「あ、あの……。僕がアビリターってどういうことなんですか……？」

突然過ぎる展開についていけなくなったのかやっと口を開いた剛毅はギルバートへとおずおずと尋ねる。

「おお？そうかそうか……。まだ発症前か。それなら知らなくても仕方ないわな、うん。お前な。能力者なんだよ。お前も知らなかったんだろうけどな。俺は勘でお前が能力者っぽいつて思ったから連れてきただけだったんだけど、ユリアが言うなら間違いない。お前は能力者だ」

「まさか……？僕が…アビリター……？」

「そうだ。お前は能力者。まあここにいる全員が能力者なんだが、ユリアは他人の能力が見える能力者なんだ。だから、お前が能力者だというのは間違いない。能力がないと思ってるかもしれないけど、まだ開花してないだけだ」

まさか自分が能力者だなんて思ってもみなかった剛毅は驚愕の事実を告げられて呆然と自分の両の手の平を見つめた。

しかし、当然それは何も変わっていない普通どおりの様子でとても能力という『異常』が体に起こっているとはとても考えられない。通常、能力という『異常事態』が体に起こると体のどこかしらに影響が出るらしく、能力者といわれるアビリターの体の一部には、色素異常だったり、奇形だったりという部分が目に見える形として現れることが多い。

そのため、剛毅は自分がアビリターであるということにはわかに信じられなかった。

「んゝたしかに目に見える範囲には異常は見られないな、うん。まあそのうち見つかるだろうし、その時でいいんじゃないか？」

剛毅の服をまくったりして足や背中とかも見たギルバートは、それ

らの場所に異常が見られなかったことを少し不思議に思ったが、そのうち分かるだろうと思い、気楽に考えた。

ちなみに俺はここにそれっぽいのがあって、下半身のどこかにあるのか、ズボンを脱ぎ始めたギルバートをシェイラが顔を赤くしてはいた。

「ててて…。まあそれよりもだ。お前もさっきシェイラの話聞いてただろう？数年前の旧ニューヨークの事件が発端でアビリター狩りが行われてるって話だ。当時の少年と同年代だってだけでアビリターって思うやつもいるぐらいだ。たしかに当時の少年と同年代でアビリターの奴は年下の奴らに比べて多いけど、そいつらの中にはもちろん何の能力もない奴もいる。最近じゃ能力者かどうか無差別で誘拐するようなこともあるらしい。実際アビリターの能力を悪用しようと思えば洗脳なんかして簡単に出来るからそれが狙いだったり、単なる武器として売買されたりって話もある。お前もたぶんそれぐらいの年だろう。そんな奴らに捕まるぐらいなら俺たちと一緒に楽しく自由に生きようぜ」

真面目な顔に切り替えたギルバートは剛毅の目をまっすぐに見て、アビリターであると自覚したばかりの剛毅に、アビリターを含む現在の12歳以下の子供たち全てが置かれている状況を詳しく説明した。

剛毅もアビリター狩りが行われているなどの噂は街に捨てられていた古新聞などを見て知っていたが、アビリターとして自覚した後で改めて聞いてみると背筋がゾツとした。

自分が見ず知らずの組織に捕まって、ただの武器として一切の自由もなくただただ苦痛を受け続ける人生を一瞬でも想像してしまった剛毅は、すぐに「よろしくお願いします」と言って頭を下げた。

そして、この日から剛毅はギルバート達との生活が始まったのだ。
た。

002 Contaminated World（後書き）

はい、ということで早めの更新で第二話でございます。あと数話分は既に書きあげているので早めにUPすることができます。

とりあえず今回は物語の進行に必要なキャラクター達を登場させました。

私がこのあとがきを書いている段階で既に6人ほどが読んで下さったようで、ありがたいかぎりでございます。

ぜひ感想などを書き残して行っして下さい。

作者である私の励みになります（笑）

003 A dangerous world

「離せ！離せつつつてんだろ！このくそつたれがア！！」

「ギル！くそがッ！なんだってんだよ、こいつら！離せ！はなせよ！このクソ野郎！」

剛毅を含むギルバート達5人は現在、工場跡にガスマスクを装着して乗り込んできた特殊部隊風の男たちによって、コンクリートがむき出しの冷たくて固い床に頬を押しつけられていた。

「悪いな、坊主。これも仕事なんだ」

それだけ言葉を発すると、男たちはそれぞれが懷から銃の形を模した注射器を取り出し、剛毅達それぞれの首筋に密着させると引き金をひいた。

プシュツと軽い音を立てて発射された針は、すぐに血中に薬を流し込み、剛毅達の意識を暗闇の底へと引きずり込んだ。

剛毅達が完全に眠りに落ちたのを確認した男たちはボストンバッグにいれて持ってきていた手錠や縄、轡、目隠しを取り出して剛毅達にかけていった。

完全に体を拘束された剛毅達は男たちに肩に担がれるようにして建物の外へと運ばれ、いつのまにか正面に来ていた黒塗りの護送車に放り込まれた。

護送車の頑丈な扉を2重のカギで嚴重にロックしたあとは、男たちも護送車の運転席側へと乗り込んで車を動かし始める。

低いエンジン音を響かせる護送車は工場跡にその音を大きく響かせ、すぐに工場跡から去っていった。

剛毅達が見ず知らずの特殊部隊風の男たちに連れ去られる少し前、ギルバート達との出会いから3年弱が過ぎた剛毅は皆とすっかり打ち解けるようになり、同年代ではあるが自分を拾ってくれたギルバートを兄貴分として慕い、時には親友として笑い合い、口調もどことなく似るほどになっていた。

そんな剛毅とギルバートは工場跡の中でギルバートとポーカーに興じている最中だった。

「よし！きたきた！ストレートフラッシュ！これならギルも敵わないだろ！」

「ふっふっふっ…。甘いな剛毅！見よ！我が必殺のロイヤルストレートフラッシュ！」

「ちょ…！ええ…！？」

「甘いな、剛毅。まだまだ修行が足りないな。それじゃ今晚のおかずはもらったぞ！」

「ちつくしよおおおおお」と悶える剛毅をしり目に、トイレへ行くと言って席を立ったギルバートは、部屋のソファアームに座って聖書を読んでいるティーダのそばを通る時にその腕を掴まれた。

「ど、どうした、ティーダ？用でもあるのか？」

「お前こそどうした？ギルバート、声が裏返っているぞ」

「そ、そんなことねえよ。悪いけどトイレに行きたいから離してく

れ」

「…ふっ、そうか。引きとめて悪かったな。いつてくるといい」

そういったティーダにギルバートは一安心し、次の瞬間にまさに目にもとまらぬ速さで動いたティーダの手によって、ギルバートの袖口が叩かれた。

バササツと音を立てて袖口から滑り落ちたのはランプのカードで、そのどれもが役にも立たないようなカードばかりだった。

「おっと、すまないギルバート。たまたま手が当たったようだ」

「うそつけえ！能力使ってたまたまって言い張るなんて白々しいぞ！」

「あー！ギルバート！いかさましやがったな！」

「グッ…ばれたか…！…ええい！騙されるお前が悪い！男ならそんなちつちえことにすんな！」

「それとこれとは話が別だろうがー！」

自身の能力である身体能力強化系の中の一つ『高速で行動出来る』という力を使ってギルバートの袖口を素早く叩いたティーダは、白々しく言葉を発した。

自分のいかさまをばらされたギルバートは思わず声を大きくしてティーダに突っ込むが、その声を聞いて、ギルバートの足元に散らばる数枚のカードを見た剛毅がギルバートに喰ってかかる。

つい数力月前開花したばかりの自分の能力である異能系の『炎』を拳に纏った剛毅の一撃が、ギルバートの顔面に迫る。

剛毅と似た能力の持ち主のギルバートが、同じように手の平に炎を纏うとその一撃を危なげなく受け止めた。

「フツまだまだ青いな剛毅！いくら不意打ちとはいえこんな一撃では俺を倒すことはできないぞッ！？いてえ！？」

そのまま不敵な笑みを浮かべたギルバートだったが、ふいに後ろから飛んできて後頭部に來た衝撃によって体ごと前のめりになってけそつになる。

「部屋の中で！あんたらの能力使っなくなっていつてるでしょうがぁ！」

同じく続けて飛んできた物体に剛毅も見事にクリーンヒットして、前景になったギルバートの背後が見れたのも一瞬で、すぐにやってきた痛みにも顔を抑える。

「燃えたらどうすんのよ！このバカ共！」

片手に氷塊を浮かべたシェイラがこめかみに青筋を浮かべて剛毅とギルバートの方を睨んでいる。

以前2人がふざけて室内で能力を使ったときにあやうく火事になるところだったのを、自分の能力の氷で防いだシェイラとしては、2人がまた室内で能力を使ったことに対して怒っていた。

「いてて…。いや、シェイラこれにはわけがあつてだな…」

「男なら言い訳するんじゃないわよ！あんたの足元にトランプが散らばってるってことはいかさまか何かしたんでしょ！それに剛毅も！部屋の中で無暗に能力使っんじゃないの！」

毛を逆立てて相手を威嚇する猫のような状態のシェイラに2人はそろって正座をさせられ、その太ももの上には即席で作られた氷が重石としてドシツと乗っている。

シェイラは怒ってもすぐに何事もなかったように振る舞うサバサバとした性格の持ち主だが、唯一の安眠できる場所を失いかねなかった前回のボヤ騒ぎで本気で怒り、3日3晩口を利かなくなったことを思い出したギルバートと剛毅はしまったなあと思いながら黙って説教を受ける。

「だいたいあんた達はいつも……！」

途中で普段の生活の中のことなどに脱線しかけて約20分以上の長さになった説教は、今日は来るのが遅れると言っていたユリアの到着でようやく終わりをつけることになった。

「あれ？どうしたのー？二人とも氷を脚に乗つけて我慢大会？」

ドアを開けてふわふわとした空気とともに現れて天然ボケをかましたユリアに、怒っていたシェイラも毒気を抜かれたのか、「気をつけてよね！」と2人に言い切ったシェイラは自室へと戻っていった。来たばかりで何も分からないユリアはそれに？マークを浮かべていたが、まあいっかーと思いなおすと来ていたコートを脱いで、ポールハンガーにかけた。

今日は寒いなーと言いつつユリアは、そのままとてと部屋の中央部に置かれていたドラム缶を利用した簡易暖炉の前でしゃがみこんで暖を取り始めた。

燃料に使われるのは灯油や炭などといった上等なものではなく、全世界規模で人間の数が減少したことで廃業に追い込まれたホテルなどの残りものだった。

管理する者がいなくなった建物はそのまま放置され、中にあった家具類も全てそのまま残されているため、それらをギルバートがありがたく拝借してきたのだ。

かつては綺麗に磨かれていた家具たちは、今では剛毅やギルバート達が暖を得るために解体されて燃料として部屋の片隅に置かれていた。

ちなみに工場跡にある全ての家具や遊具は、そうやって運び込まれたが解体されずに済んだ生き残りで、今では大事に使われている。そんな生き残りの中の一つである座り心地のとてもいいソファにドカッと腰をかけたギルバートは、慣れない正座によってしびれた足に力をかけないようにだら～と脱力していた。剛毅の方は日本にいたところに正座などには既に慣れていたのでそのまま平気そうに立っている。

そして剛毅は一人で暖をとっているユリアのそばにしゃがみこむと、外の寒さで冷えたユリアの頬に手を添えた。

「あつたかいねえ。剛毅もギルバートも燃料いらすの人間ホツカイ口でうらやましいなあ」

能力で掌の温度を上げていた剛毅の手がユリアの頬を挟むと、ふにやつとユリアが笑って気持ちよさそうにする。

「私の能力なんて剛毅達の方がなんなのか～っていうことぐらいしか分からないから全然実用的じゃないもん」

「いやいや、そんなことないよ。ユリアが能力者だって言ってくれなきゃ俺は信じられなかったよ」

「おい剛毅！俺があの時言ったのは信じてなかったのかよ！」

「あ、あゝ…。ギルバートだからちよつとね。いてっ！」

口を尖らせて拗ねたような口調で言ったユリアのフォローをしていると、ソファで脱力していたはずのギルバートがいつの間にか傍にいて剛毅の頭をパシンと叩いた。

その様子を見ていたユリアが「あははー」と笑ったので、剛毅は苦笑しながら再度口を開く。

「ところで今日はちよつと来るのが遅かったけど何かあったの？」

「あ、うゝん。それなんだけどね…。実は前から言われていたんだけど、お父さんがもうここに来るなって…。それで言い合いになっちゃって遅くなっちゃった…」

「うゝん、そうかあ…。やっぱり親からしたら心配だよなあ…」

「でも！剛毅やギル達優しいのは私知ってるし、それを何度も説明したんだけど話も聞いてくれなくて…。それで喧嘩別れみたいな感じで飛び出してきたの…。」

「ユリア。そりやお父さんの方が正しいぞ。お父さんから見たら俺たちはこんな工場跡にいるんだから、そこらのゴロツキなんかと一緒だと考えるのも仕方ないだろう」

目じりにちよつと涙を浮かべながらユリアはそう言うが、ギルバートが横に首を振りながら少し悲しそうに言う。

「ごめんね。皆…」

「別に…。ユリアが謝る必要はない。ユリアは俺たちがそういう奴らじゃないってことを知っている。それだけで十分だ。それに俺たちはそういう扱いを受けたとしても何ら変わりはないんだ。それに……ユリアにはそんな悲しそうな顔は似合わない。だからユリアは笑っていてくれ」

ユリアがしゅんとした様子でぼつりとこぼすように言った言葉に対し、今まで部屋の一人掛けのソファに座って聖書を読んでいたティードがそれをぱたんと閉じると、ユリアのところまでやってきて頭に手を置いた。

「つか」。あいかかわらずキザだねえ、ティードは。この色男！」

「今まで何人口説いてきたんだよ！」

その様子を見ていたギルバートはなんとなく変になった空気を払拭しようとしてそれを茶化し、そして剛毅がそれに乗っかる。

「分からないな。それに出会いは俺からではなく向こうからやってくるものだしな」

それを綺麗にかわしたティードは、カウンターとばかりにちょっとした皮肉を返してくる。

「つけ！ああああイケメンっていうのは本当に羨ましい限りでございますよーだ。なあ剛毅！」

「え？俺に同意を求められても……。そうか、ギルは自分がイケメンじゃないのを気にしていたのか。かわいそうに……」

「んだとゴルア！やんのか剛毅！」

「へえ！次こそ決着付けてやる！」

「望むところだコラ！ かかってきやがれ！」

「うっさい！！アンタら静かにしろー！！！！！！！！！！！！！！」

またも殴り合いに発展しそうになった時、ドガンツと部屋のドアが開いて、再びのシェイラの怒声とともに氷の塊が剛毅とギルバートに叩きつけられて、2人は床に倒れることになった。

そんないつも通りの光景を見て安心したのか、ユリアの口元には少し笑みが戻っていた。

それから数時間後、ユリアが今日は家の方に戻りたくはないと言ったので4人はユリアを泊まらせていくことにして、一緒に食事をとっていた。

食事といつても、テーブルの上には缶詰めや賞味期限ぎりぎりの保存食品といったものがあるだけで、手作りの料理というものはほとんどない。

手作りの料理があるといったら、ギルがどこから持ってきた肉を串に刺して、それをドラム缶の炎で焼いたものぐらいだろう。

人類の大部分が消え去った今では、以前のようにお店にいけば惣菜コーナーに料理が並んでいて、お金さえ払えばおいしい料理が食べれるということとはなくなった。

物資も乏しい今では飲食店と言えは個人経営の貧相な食堂ぐらいで、

味は単調、量も少ない、しかし料金は高いという状態だ。

とうていお金などの持ちあわせがない者は街に残っているものを漁るか、なんとか野菜を自家栽培するぐらいしかない。

剛毅達は栽培をしようにも、店などに肝心の種がないためどうすることも出来ず、街を歩き回って食料を得る日々を送っている。

まさにジャングルでの一日が食料探しに追われるだけで終わるように、この廃れたコンクリートジャングルでの一日も食料探しに追われるだけで終わる。

そんな中でユリアを除く4人が日々の生活に苦しみを覚えて自殺をしないのは、幼少よりそんな厳しい日常が当たり前だったことと、仲間がいて笑あうことができるからだろう。

基本的に食料調達は男子である剛毅、ギルバート、ティードが行い、やることは限られているが家事をするのは基本的に女子であるシェイラの担当で、ユリアは来た時にその手伝いをするぐらいだ。

シェイラ達が食料調達に出向かないのは、廃れた今の街では荒事に対する力がどうしても必要になるというのもあるが、最も大きい理由は単純に『女性』として襲われるからだ。

以前実際に襲われかけたシェイラは普段こそ強気なキャラを演じているが、実際は心の中で3人に対してとても感謝していたりする。

そして今日も一日が無事におわることに安心しつつ、5人は工場跡の中にあるそれぞれの部屋に向かう。

剛毅は5人の中で仲間になるのが最も遅かったため、工場の出口近くに設けられていた部屋をもらって寝ているのだが、たまたまその日は寝つきが悪く、浅い睡眠を繰り返していた。

そんなときに外からかすかにザツと地面を踏む音が聞こえてきて目が覚めた。

野良犬か何かが通ったのかなと寝惚ける頭で考えつつ、ふと外を見ようと思つて窓に近づこうとした瞬間にガラスが砕け、部屋の中に何かが転がり込んできた。

いくつかの穴が空いた黒い筒状の物体が転がり込んできたのに気付いたが、それが何かを思い出す前にそれは目が眩むほどの光と、耳が聞こえなくなるほどの音を放つて爆発した。

まだ頭が微妙に寝惚けている上に、平衡感覚まで失つた剛毅の体はグラリと部屋の壁にぶつかり、そのままずると床に転がった。

すぐにガラスを破つて入ってきた男は剛毅が逃げられないように動きを拘束しつつ、部屋の外の廊下に引きずり出した。

剛毅はようやく戻ってきた視界であたりを見回すと、そこに同じように拘束されつつ廊下に引きずり出されてくる仲間たちの姿をとらえた。

一瞬何が何だか分からなかった剛毅だが、男たちに再度組み伏せられてコンクリートの床に頬を抑えつけられた剛毅は周りの男たちを見てようやく理解した。

こいつらが噂のアビリター狩りの奴らなんだろうと。

逃げようと動いてみるがしっかりと関節を抑えられていて身動きがとれず、炎を出そうとすると関節を折られるかと思うほど締め上げてくるので集中力が続かずに能力が使えない。

まわりを見ても、同じような状況なのか苦悶めいた声が聞こえるだけで能力が使われる様子は無い。

「FUCK！なんだってんだテメーら！ああん！？離せよこのクソ野郎どもがア！」

そんな中でギルバートは唯一動かせる口を動かして相手を罵るが、

相手もプロらしくガスマスクの下にある表情を一切変えることなく再度締め上げる。

「ギル！」

苦痛の叫びを上げるギルバートに剛毅が声をかけるとギルバートは剛毅に気がついたのか、剛毅の方へと顔を向ける。

「剛毅！ああクソ！なんだってんだよこいつらはよお！離せこのクソつたれどもがア！」

しかし、いくらギルバートが叫ぼうと男はギルの関節を締め上げるだけだ。

「ギル！くそ！なんだってんだよ！離せ！はなせつつってんだろ！クソ野郎！」

剛毅がそうやって叫んでいると、工場の出入り口から悠々と入ってきた隊長らしき男が銃の形をした注射器を構える。

「悪いな、坊主。これも仕事だ。怨むなら自分の運命を怨め。」

剛毅は首筋に薬を打ちこまれてすぐにやってきた眠気に必死に抗おうとしたが、やはり薬の力には敵わずガクリと全身の力を抜いて眠りに落ちたのだった。

003 A dangerous world (後書き)

さてさて、今回もストックのおかげで早めの投稿でござる。

熱い展開を書きたいけど、それはまだ先の展開なのです。残念…。

もうしばらくお待ちください。

ところで何か感想などがあれば自由に書き込んで下さいね。

ただし、私はメンタルが弱い人です（キリッ

それから数時間後。

剛毅達は目を覚ますと窓の無い12畳ほどの部屋にいることに気がついた。

それぞれの腕や足などには既に拘束具は無く、体の関節を動かしてみても、外れているということではなく、十分に機能している。

プロの集団らしき人達が動いていたのに、拘束もされていない今の状況は何か変な気がする。とギルバートが思い始めた矢先、部屋の奥の方の壁に埋め込まれたテレビに光が付いた。

破壊防止のためなのか強化ガラスで隔てられた先にある24インチほどのテレビには、まず最初に第二アメリカ合衆国の国章が現れ、次に文字が流れ始めた。

その内容とは要約すると「第二アメリカ合衆国アビリター保護法プログラム適用により、能力を監視下におけると特別に許可された場合を除き、アビリターを制限保護区域におく」というものだった。

この法律は第二アメリカ合衆国として隕石漂着から再生を果たした政府が、アビリター達が持つ個々の能力の暴走や悪用を恐れ、制定したものだった。

あまり公にされず密かに制定されたこの法律を知るアビリターは少なく、多くのアビリター達がこの法律によって制限保護区域に送られた。

能力を持たない一般人はアビリターの犯罪に脅威を感じていたのに加え、お金持ちの家のアビリターならば『特別許可』という物を『許可料』を支払うことで免れたため、人権を無視したようなこの法律は、改正される気配が無いどころか逆に支持され始めるほどだった。

そしてこの法律によって制限保護区域に実質的に連行された剛毅達は、あまりの理不尽さにギルバートが切れて強化ガラスを割り、中のテレビを叩き壊したあと、テレビが終わると同時にロックが解除されていたドアから外に出て、建物の出入り口の窓口のようなところで割り当てられた自宅用らしき鍵を受け取ってようやく外に出ることができた。

自宅を割り当てられたといっても、隕石漂着のせいでゴーストタウンとなった街の空き部屋を適当に割り当てられただけなので、毎日の安全が完全に確保できているわけではない。

なんとなればアビリターが溢れているであろうこの街でなら侵入など造作もないことなのだから。

建物の外へ出て周りを見渡すと、立っているマンションの中には窓が割れて無くなっているところの方が割合で言えば多いぐらいで、防犯などは微塵も期待できそうにない。

とりあえずは今後住む場所の確保ということで動き出した剛毅達は隕石漂着以前に作成されていたのであろう、観光場所なども乗っているカラフルな3つ折りの地図に従って歩き始めた。

街の雰囲気は明るくも暗くもないが、ところどころには生活用品や食料品といった店などがチラホラとあるので、食料を奪い合うといった混沌とした様子にはなっていない様子だ。

しかし、やはりアビリター対策なのか店の出入り口には完全に武装した軍人らしき人が立ち、その奥に見えるレジ打ちの人もやはり武装したままレジ打ちをするというシニカルな光景が目に入る。

そして、店の中でおとなしく普通に買い物をしているアビリターたちがいる一方で、裏通りに通じる路地の方へと視線を移すとガラスの悪そうな連中もいる。

ひとえにガラスの悪そうな連中といっても皮膚が岩のようなものもい

れば、獣のような牙などを持つ凶悪そうな一風変わった奴らもいる。都会の暗闇などで生きてきた剛毅達は、この街に入ってきてそうそう睨まれたくはなかったのでそれとなく視線を外しつつ、何でも無い風を装って通りを進んでいく。

水が枯れてしまった噴水がある広場を通り過ぎ、更に数分歩くと、元は家族が住んでいたのであろう45坪ほどの壁の表面をレンガ張りにした一戸建てが見えてきた。

鍵にくくりつけられていた札に書かれた住所と、地図に載っていた住所と見比べて、そこが割り当てられた住居だと分かった剛毅達は鍵をドアに差しこんで家の中に入る。

家の中は既に一通り荒らされたあとなのか、家具はひっくり返っていたり、紙屑が散乱していたりと何かの役に立ちそうなものはほとんど残っていない。

あるのは持つていくほどの価値が無い生活雑貨や、食器類などばかりでテレビやパソコンといったものは根こそぎ持ち去られているようだった。

とりあえず腰を落ちつけようという流れになった5人は、ひっくり返っていたソファを元に戻し、砂埃をはたき落して窓を開け放ち、換気を始めた。

長い間放置されていたのだろう家の中は埃や、濁った空気が溜まっており、息をするのが嫌になるほどだったが、家中のすべての窓を開け放つと、この街には不釣り合いな爽やかな風が吹きこんできて溜まった空気が一気に一掃されていった。

何か掃除が出来るものがあるかと家の中のドアを開けていくと、階段下の収納スペースにホウキや洗剤などの掃除用具があったので、

それらを駆使して家の中の細かな埃やゴミを取っていく。

数時間もすると家の中は見違えるようになり、電化製品などが無いのでいささか殺風景に映るものの、5人が住める環境にはなった。

しかし、家の中の窓などは依然として割れたままなので、それらを直さなければ安全は確保できない。

窓をどうするかと話し合った結果、ただのガラスではこの街では少々心もとないということで、小さな窓はそのままガラスで、人が通れそうな窓は押し開き式の鉄板にすることに決めた。

とはいえ、鉄板などがそうそう過程に転がっているわけもないので、剛毅とギルバートは鉄板になりそうな材料を探しに出かけることにした。

ちなみにティードは女性陣の護衛として家の中に残ることになった。

「で、探しにわざわざ出てきたわけだけど……まあ……そこら中に散らばってるわな。」

玄関から一步外に出たギルバートが周りをザッと見渡してつぶやく。家の前の通りには乗り手がなくなった自動車が、道路の端の方にパンクした状態で止まっていたりするのだから、鉄板になる材料などはいくらでもあった。

ちょうど家の前の道路の端に寄せられていた車に目をつけた2人は、内装などの鉄板の材料にならなそうなものを剥ぎとっていく。

あらかたとり終えた2人は、それぞれに能力を使って、熱で鉄を切断し、小分けにして窓のところへと持っていく

高熱で切断したために、常人が振れば一瞬で大やけどを負う程の熱を持っている鉄片だが、剛毅とギルバートは手の温度を鉄片と同じぐらいの温度に上げているのでやけどを負うことは無い。

高温の鉄片を窓のところまで運んだ剛毅達は、窓の枠の寸法を採り、その大きさに合わせて鉄片を成型していく。

そのままはめ込んでしまうと熱で窓枠が傷んでしまうため、小さな穴をあけてから鉄板を放置して冷ます。

それが終われば、次の鉄板を作る作業に移り、またそれが終わればまた次へと繰り返していく。

全部の鉄板を作り終えたところには最初に作った鉄板が十分に冷め、窓枠に合わせても問題なくなったので窓枠に鉄板を当てて、蝶つがいと鉄板を溶接の用量でつなぎ合わせる。

全ての窓に取り付け終わると、閑静な住宅街にたたずんでいたろう家が一变。

まるで小さな要塞のように、鉄で補強されてガツシリとしたつくりのものになった。

出来栄を外から見てなかなかの武骨さに満足した2人は、意気揚々と家の中に入った。

女性であるユリアとシェイラはどことなく不満そうな顔だったが、現状を考えると安全優先なのが分かっているのか口をだしてくることはなかった。

ともかくにもなんとか自分たちが住める環境にはなったわけだが、今度は肝心の食料がない。

どこかからとつてくるとしても、数時間前にこの街にきたばかりで地理については右も左も分からない5人は今日の夕飯をどうするか悩む。

飲食店などに入れるだけの金が無い剛毅達は、結局はいつもどおりに食料の調達にいくということになったのだが、今回はユリアとシェイラも含めた5人だ。

当初はギルバートが家で待っているべきだと主張したが、街のことを早めに把握しておくべきだというシェイラの主張と、ユリアが3

人が守ってくれるから安心できるよね？といったのにギルバートが折れた。

かくして食料調達に出かけた5人は来るときに見かけた嚴重な警備のスーパーマーケットらしきところを目指す。

「へえ…。警備が物々しいから高いと思っていたら意外と安いじゃない。」

店に入ったシェイラが店内に表示されている値段の描かれた紙を見渡している。

「…けど。なんでこんなに安いんだ…？アビリターに対する風当たりは強いってのに。なにかあんのか？」

「ふむ、どうやらわけありというみたいだな。ほら、これを見ても」

激安の価格で売られているものばかりがならんでいる様子を見た剛毅が訝しげに首をかしげる中、商品を物色していたティードが一つの商品を取って剛毅に投げ渡す。

剛毅は渡された商品を観察してみるが、特にこれといったものは無いように思えた。

「これがどうしたってんだ？特に何も無いように見えるが…」

「賞味期限をしてみる。ソレもコレもアレも…全部賞味期限が既に切れているヤツばかりだ。みる、この野菜なんて萎びてるし、あの果物なんて柔らかくなってる。」

あれこれと商品を見ていたティードが色々な品物を見て剛毅に投げ

渡してくる。

そのどれもが賞味期限ぎりぎりなものや、既に過ぎているモノ、缶詰めの商品に至っては大幅に過ぎているモノが大量にあった。

「なるほどね…。だから安いのか。そうかよ…やっぱり、俺たちはそういう扱いなのかよ。クソッ…！」

ギルバートがあまりの扱いに腹を立てて近くの棚をガツと蹴ると、レジにいる男がショットガンを掴んだ状態で5人の方に睨みをきかせてくる。

わざわざ政府に絡んでいる奴と揉め事を起こすのを嫌ったギルバートはイライラとしながらも矛を収める。

すると相手もいつでもショットガンを打てる状態を解除してただのレジ係に戻る。

気分が悪くなったらしいギルバートは一人で帰るといい、店の外に出ていった。

残された4人は悔しいけれど食べ物が無ければどうしようもないということ、連れてこられるときに没収されずに残っていたユリアの財布の中に入っていたお金を使って食材を購入した。

「それにしても気に食わんな。政府の奴らは俺たちアビリターをなんだとおもっているんだ」

いつもはクールなティータが少しイライラと怒りをにじませた声でいう。

「ちょっと皆とは変わった力を持つちゃっただけで、それ以外は皆と変わらない人間なのにな…。人間扱いされないともなると…ちょっと辛いなあ…」

「そうね…。こうもあからさまだとちょっとクルものがあるわね…」
ユリアが少し伏し目がちに落ち込んだ風にいい、シェイラは悲しみと怒りがこもった瞳をしている。

「でも、俺たちにはどうしようもない…。結局時間が立つて俺たちが認められるまではこの制限保護区域からも出られないんだろうな」

「認められる。認められなければ…。その時は無理やりにでも認めさせるだけだ」

少し弱気の言葉が剛毅の口から出ると、ティードが静かに、それでいてはつきりとした口調で言った。

剛毅はその言葉に何かを感じた気がしたが、その何かが結局わからなかった。

004 Constrained world (後書き)

さてさて、早めの更新第4段です。もうそろそろストックが無くなってくるので、更新頻度が落ちます。

たぶんあと1話ぐらいは早い更新ができるかとおもいます。

4話ほど進み、どうでしょう？ちよつと展開が急かなとは思ったのですが、あまりグダグダするのも…と思ったのでこんな進め方になりました。

要望があれば、外伝的な感じで剛毅が育てられてきた背景とか色々詳しいのを書こうとおもいます。

005 World started to move

ギルバートは一人で夜の黒に塗りつぶされた裏路地の闇の中を歩いていた。

「……いい加減出てこいよ。下手な尾行なんかしやがって……バレバレだったっの」

くるっとギルバートが背後を振り返ると、建物の影の中から2人組の男がでてきた。

片方は腕に巻きつけるようにして水を流しながら自分の能力を見せつけてくる長身の男で、もう片方は獣のような体毛に鋭い爪、牙を持つ獣男だった。

「ハハッ。いつからきづいてたんだい？それでも僕らは結構尾行がうまい方だと自負していたんだけどね」

「最初からだ、バカが。大方スーパーから出てきた俺が金を持つていると踏んだんだろうが……。生憎だな、俺は金なんてもっちゃいねえ。丁度いいからかかってこいよ、今の俺は気分が悪いんだ。ぶちのめしてやらあ」

拳から炎をまき散らしながらギルバートは相手に手を向けてクイクイツとかかってくるように手の掌を自分の方に数度折り曲げて挑発する。

「へえ……。いい度胸だね。でも相手が悪いよ、君。僕の能力は水。火ごときが僕に勝てるわけ無いじゃないか。痛い目をみないうちに膝について謝ったらどうだい？」

「へへへッ。そうだ、わりいこたあいわねえから俺たちに許しをこいな。今ならその生意気な面に拳をブチ込むだけでゆるしてやるぜえ？」

「ハッ、バカが。ワン公はそこらの電柱にでも小便しとけ。そつちのキザったらしいお前もかかってきたらどうなんだ？いくら賢そうな言葉使いをしてもそのバカ面はかくせねえぞ」

「てめえ！野郎ちようしにのりやがつてえ！」

獣男のニヤニヤとした顔が怒気で一気に茹であがるように真っ赤に染まり、水使いの男が目をむきだして怒鳴る。

獣男が強靭な脚力を使つてすぐに肉薄してきたが、ギルバートは下から救いあげるような見事なアッパーを獣男に返し、のけ反つて無防備になった胴体に真っ赤な炎をまき散らす拳を叩きこんだ。

炎を纏つた拳はやすやすと獣男を吹き飛ばし、拳が当たつた獣男の胴体には拳の跡が焦げとなつて焼きついていた。

「っけ、雑魚が……。……おい、どうしたよ。てめえのペットのわんちゃんはおねんねしたぜ。お前も一緒にあそこでおねんねするか？ん？」

一瞬で倒された味方に啞然としている水使いだったが、ギルバートの言葉で直ぐに頭に血が上り、自分の能力を使い始めた。

腕に巻きつくようにして流れていた水は腕から離れ、まるで鞭のようになつたあと、鋭い先端をつくりギルバートめがけて飛んでくる。

無限に伸び、思い通りにしなり、蛇のように素早く動く自分の必殺技が決まったとおもつた水使いは口元にニヤアツとした笑みを浮か

べ、ギルバートをみるが、ギルバートもまたニヤツと笑みをうかべていた。

一瞬怪訝に思った水使いだったが、ギルバートに避ける気配が無いことに気付き、勝ったと確信した。

しなる水の槍がギルバートの頭に当たると思った瞬間、その水の槍はギルバートによって掴まれて一瞬で蒸発した。

「な！なぜだ！貴様は火だろう！なぜ水がおまえにきかない！」

「ハッ。お前勘違いしてるぜ。俺は『炎』使いだ。ちんけな水鉄砲なんかじゃ俺の炎はけせねえよ」

そういうギルバートは拳の炎を一際大きくし、拳を覆い尽くすほどの炎のグローブをつくり、一瞬で接近してうるたえる水使いの腹の中心に拳をブチ込んだ。

全体重を乗せた炎のパンチの威力に体をくの字におれさせて吹っ飛んだ水使いは、そのまま裏路地の壁に叩きつけられてズルズルと汚水や埃で汚れた地面に横たわる。

「ケッ。バカが。もうちょっと成長してから出直せ、雑魚」

最後に一瞥したギルバートは、2人の男の懷から財布を抜き取り、中の金を抜き取ると空になった財布をぞんざいに投げて返してその場から立ち去ったのだった。

「ただいま」

新しい住居となった場所に帰ってきたギルバートはソファにどっか

りと腰を下ろした。

「おそかったじゃない。先に帰ったはずなのにどこにいったの？」

「ん、ああ。なんかゴチャゴチャうるせえ奴が絡んできたからぶっ飛ばしてきた。はい、お小遣い」

「ん、そう。お疲れさま。今までの分はなくなっちゃったし、貯めておくわね」

そういう世界で生きてきたシェイラは綺麗事だけで生きていけないことはとくに分かってるのでそのお金を当然のように受け取り、家の中に残っていたのだろう黒い財布にそれをしまった。

「ああそうそう。ご飯だけどさきにたべちゃったわよ。まだ残ってるから後で食べておいてね」

「りょーかい」

そう答えたギルバートはよいしょとソファから腰を上げ、テーブルの上に置かれている缶詰めからスパム缶を一つ選び、それをあけてペロリと平らげた。

余分な油は特に使い道もないので排水溝にそのまま流し、来た時には通って無かった水道が使えるようになっていたので、シンクに残ったカスを流す。

空き缶をゴミ箱に投げ入れたギルバートは、対して膨れなかった腹をさすりながらまたソファに座りなおす。

それを見ていた剛毅は、特にやることも無いのであることを思い出して、自分の首筋に手を当てた。

手を首筋にあてると、皮膚の下からは多少ゴツゴツとした違和感が

ある。

その違和感の正体はアビリターの体に埋め込むタイプの追跡装置だった。

連れてこられた眠っている時に埋め込まれていたのか、施設で見た映像で説明をうけてようやく気付けたぐらいだった。

アビリターの行動を把握するという名目で付けられているだけで、激しく動きまわっても問題なく、人体に何らかの悪影響を及ぼすものではないのだが、ふとした拍子に違和感をかすかに感じるので剛毅はどうも気に入らない。

それに、まるで自分が政府に管理されているペットの様な気もしてきて剛毅は余計にこの機械のことが気に食わなかった。

とはいえ、壊したり、とり出したらすぐさまこの機械を管理している施設に報告が行くようになっていいるらしいのでおいそれと手を出すわけにはいかない。

全くもって忌々しい法律を作ってくれたなあと思う剛毅は、首筋からようやく手を離れた。

「そういえば明日市街地郊外の元陸上競技場までいかないといけないんだっけか？」

ソファに座ってゆっくりとしていたギルバートがふと思い出したように声を発すると、ユリアがそれにこたえる。

「そういえばいつてたね。色々なことがありすぎて忘れてたよ。」

「

「まあたしかに色々あったしね……」

ユリアの言葉に、シェイラは苦笑いを浮かべつつも、ユリアはこんなときでもマイペースなのね等と思っていた。

「で、どうするの？いくの？」

「あー。別に絶対こいと言われたわけじゃなかったしなあ。俺はめんどつくさいんだが…」

「…いや、俺はいった方がいいと思う」

シェイラの呼びかけにギルバートは面倒くさそうに頭をポリポリとかきながら答えたが、そこにいつのまにやら部屋のドア付近の壁に寄り掛かっていたティードが口を挟んできた。

「お、ティードか。いつのまにそこにいたんだ？」

「ついさっきだ。それはさておき、俺たちはどうせ何も予定が無いし、この街についての情報はほとんどといっていいほどないんだ。わざわざこんな街を作ってまで俺たちを『保護』しているんだ。いきなり射殺ということはないだろう」

「…そうね。私も行って見た方がいいと思うわ。何も知らないよりは何か少しでも情報がある方がこんな街だと安心できるからね」

「私も行ってみたいなー。同じ境遇の人たちとならちよつとは仲良くなれそうだしー」

いや、それはないだろうとユリアを除く全員は思ったが、ユリアは笑顔を浮かべていて素で言っていそうなので言葉に出すことは無かった。

「剛毅はどうおもうの？なんだかさっきから黙りっぱなしだけど」

ずっと黙ったままだった剛毅に気付いたのか、シェイラが話を剛毅にふる。

「んゝ。そうだなあ。まあなんだか怪しい気はするけど、流石に命がかかるということは無いだろうし、別にいいんじゃない？」

剛毅は少しだけ、なんだか面倒くさそうなことになりそうな予感がしたが、とくに気にしないことにして、賛成の方に回った。

「なんだよー。俺一人だけ仲間はずれかよー。まあいいわ。どうせ俺も家にいたって暇だろうしついていくことにする」

一人だけ反対の方に回っていたギルバートも他の全員が賛成側に回ったので、一人だけのお留守番を嫌って賛成側へと旗色を変えた。
翌日、全員で元陸上競技場に行くことにした剛毅達は、それぞれが掛け布団などが無いマットレスがむき出しのベッドに横になって眠った。

翌日、広場までわいわいと雑談をしながら徒歩で向かっていた一行は、広場についてから驚いた。

それもそのはずで、体格も人種も雑多な人々が広場に集まっていて、しかもそのすべてがアビリターというのだから驚くのも無理は無い。呼ばれているのが自分たちだけではないだろうと思っていた剛毅達も流石にこの人数には驚いた。

ざっと見渡して約2000人OVER。

到着してから見た競技場案内看板によると、まだ第二・第三競技場があるのでしたら6000人は超えているのかも知れなかつ

た。

これほどの人数を集めてどうするのだろうと思う剛毅達だったが、周りの人々は適当にそこらへんに座っていたりするので、とりあえず腰を下ろそうということにした。

「それにしても多いな。さすがにこの人数は予想外だった」

「そうだねー。こんなに人集めてどうするんだろ？」

「さあな…。なんにしろ、奴らがこんな街に俺たちを閉じ込めている時点で、手放して喜べるようなことが起きるとは思えん」

ティードの一言にそれもそうだと全員がうなずくと、ちょうど競技場のスピーカーから音声が流れ始めた。

と、同時に競技場のスタンド付近に作られている台の上に立ってマイクを軽く叩いている男性の姿が見えた。

「あ、あー、テストス…。ん、…皆さんおはようございます。私はアビリター特別保護区域『特区』の責任者のマイク・ダグラスです。今日皆さんに集まってもらったのは、お願いがあるからです。それは、皆さんに軍に入ってもらいたいというものです。もちろん、軍に属していただければ、任務内容に見合った給料や様々なサービスを提供しますし、安全な住居も個人に贈与いたします。ですが、それと引き換えに色々と制約も課せられます。犯罪を犯せば軽犯罪以外は全て死刑、出勤時には危険な任務が与えられますし、国家には忠誠をつくすことを誓ってもらいます。入隊してしばらくの間は、訓練期間として軍の施設にしばらく入ってもらうことになりますが、そこでもこの制約は課せられます。もちろん訓練機関でも給料はつけとることができます。ですがもし、軍に入りたくないという方が

いても問題はありません。ただし、その場合は当然給料も出ませんし、安全で快適な環境というのも提供できません。」

「皆さん方アビリターは、今非常に微妙な位置にいます。」

剛毅は微妙どころか今は最悪な位置にいるじゃないかと心の中で思っていた。

「アビリターの皆さんには、一般の人が持つことが出来ない特殊な能力が備わっています。その力は個人個人によって性質も影響の大きさも様々ですが、悪用をすれば危険なものであることに変わりはありません。今現在、アビリターの能力の使用に関して適正な法というものが整備されていません。だからこそ、私を含む一般の方々はその能力に畏怖し、自分達と違うものということで排除しようとしてしまいます。私もアビリターの全員が危険だとは思っています。が、そういう風に考える人たちが大勢おり、世論がそういう風に動いてしまうことをお許しください。今はまだ大規模な犯罪が起きていないので大きな動きはありませんが、もしひとたび間違いが起きてしまうと一気に人々の感情の堤防は決壊し、中世ヨーロッパで起きた魔女狩りが再び行われかねません。だからこそ、アビリターの皆さんには軍に所属し活躍をすることで、今にも崩れかねない危うい立ち位置を確固たるものとして欲しいのです。重ねて言いますが、これは強制ではありません。あくまで自由意思によるものです。……それでは、最後になりましたが、皆さんが良いご決断をなされることを私は心から祈っています。今日は集まっていたいただき本当にありがとうございました。」

そういつてマイク・ダグラスが深々と頭を下げてから台を降りた後、入れ替わるようにして黒いスーツに黒いサングラスをかけた男がマイクを握った。

「さきほどの話を聞いて、軍に属してみたい方、詳細を聞きたいという方はここから数分歩いた先の第三競技場奥の広場にテントが複数あるので、そこで話や手続きを受けてください。それでは、皆様本日はお集まりいただきありがとうございました。これにて解散とさせていただきます。」

スーツにサングラスの男はそれだけいうと台の上で一礼し、それからマイクとスタンドを持って台の上から下りて行った。

「はあ……。また面倒なことになったなあ。軍に入ってたか。どする？」

ギルバートがあからさまにため息をつき、首だけをくるりと回して後ろを振り返ると、そこにいる剛毅達に尋ねる。

「ふむ……。俺は反対だな……。邪魔な俺たちをわざわざ起用するだなど、俺たちを兵器として前線で酷使するためとしか考えられんな。国に捕らえられた俺達はその国のために命を賭す……。俺はゴメンだ……。とはいえ、先立つものが無いし、この街での稼ぎ方も分からないのは事実だ。俺としては中立。お前たちの意見に従うでしょう。」

ティードはそれだけ言ったあと、木陰に移動すると木に背を預けて座り込んだ。

「ふーん、ティードは中立……。ね。私もどっちでもいいんだけど……。やっぱりお金とかこれからのことを考えると、軍に入った方がいいのかなあ……。私は一応賛成ってことにしとくわ。」

「シェイラちゃんは賛成かー。私はせっかく綺麗にしたここを離れ

るのはイヤかなー。それに軍に入っちゃうと制約とかで自由が無くなりそうだし…。まだまだ色々と大変だとは思っけど、皆で力を合わせたらなんとかなるよー」

「ふむふむ、ティードが中立、シェイラが賛成、ユリアが反対か。こりゃまた綺麗に分かれたもんだな。んで？剛毅はどうするよ？」

シェイラが金銭面の問題で軍属賛成派。ユリアが生活面で反対派といった具合に別れるのを聞いたギルバートが残った剛毅の意見を求める。

「あー。俺は賛成かな。やっぱりどうしても金は必要になるだろうからなあ。…でも、軍にシェイラとユリアを入れるのには反対だな。俺のイメージでしかないけど、男の比率が高いところに2人を入れて、襲われないとは言えないからな。2人はこの街にとどまるべきだと俺は思う。」

「なるほどな。たしかにそりやあるだろうな。たまに軍がレイプやらなんやらで問題になることがあるしな。剛毅の言うとおりにした方がいいかもしれん。ちなみに俺個人の意見を言わせてもらうと、賛成だ。ただ、俺も剛毅の意見に賛成で2人は絶対に残す。でも、それだとこの街で暮らすことになる2人が心配だから、ティードに残ってもらいたいんだが、ティードはそれでいいか？」

「かまわん。もとより俺は軍属反対派だ。金銭面でどうにかなるなら問題はない。2人のことは俺が責任を持ってまもろう。」

「すまん、ティード。まあ訓練施設に入るってたって休日でもどつてくるぐらいでkindaro。」

「ちょ、ちよつと！じゃあギルと剛毅の2人だけで軍に行くつていうの！？」

「それしかないのは分かってるだろ？それにお前たちはもう一度未遂とはいえ、襲われかけてるだろうが。俺としては目の届かなくなる可能性のある場所にお前たちを入れるわけにはいかねえ。」

ギルバートの断固とした意思が込められた視線を向けられたシェイラは、なにも反論することが出来なくなつて口を閉ざす。

「じゃあ休日になつたらちゃんと帰つてきなさいよ！そつちで遊び呆けていたら絶対に許さないわよ！」

「ハハハ。そりや絶対に帰つてこなきゃだめだな。シェイラを怒らすと後が怖いからなあ。」

「剛毅！あんたもよ！あんたも遊び呆けて戻つてこなかったらヒドイ目にあわすからね」

他人ごとだと思つてギルバートとシェイラの会話に笑っていた剛毅は、シェイラの言葉にその場でビシツと固まり、その様子を見られた皆に笑われることになつたのだつた。

005 World started to move (後書き)

さて、ということでも話が終了したところで、これからの進め方について説明いたします。

第二章は基本的に剛毅とギルバートとこれから出てくる人達で織りなす軍務編という感じになります。

なるべく軍っぽくしたいとは思いますが、私が軍の内部を把握していない＆あまりきつくしすぎたら進めにくいということで自分なりに適当に設定作りながら進めていきます。

なので分かりづらいとこがあったら質問してください。なるべく早くお答えします。

そして、街に残ることになる3人ですが、こっちは第二章番外編といった感じで、第二章本編が済んだあとにお送りするつもりです。

006 To the world of military (前書き)

今回はちょっと短いです

なんということが、タイトルの付け忘れですw

006 To the world of military

「シェイラもユリアもくれぐれも無茶なこととはしないように。ティードがいるから大丈夫だとは思っているけど、俺もギルも2人のことが心配なんだからな」

玄関先で網上げ式のブーツをしっかりと結いつつ、濃い緑の迷彩服を纏った剛毅が後ろに立っている3人の方へと顔を向けつつ言う。

「それじゃあいつてくるわ。ティード2人のことは任せたぞ」

剛毅と同じように網上げ式のブーツを履いて迷彩服を纏ったギルバートは既にバックパックを背負っていて、剛毅が立ちあがったのを確認してから3人に体を向けて言う。

「ギル、本当に気をつけてよ。何があるか分かんないんだからね」

「ハハッ！心配すんなって俺が強いのはシェイラだって知ってんだろ？すぐに活躍して有名になってやるよ」

本当は活躍なんてしないで良いから無事に戻ってきてほしいと思うシェイラは、少し微妙そうな顔のままだった。

「剛毅も気をつけてねー。休む時はしっかり休んで無茶しないようにね？」

「分かってるさ、ユリア。無茶はしないし、無理もしない。約束する」

バックパックを背負いなおしながら剛毅はユリアに言うが、目を合
わせなかったのが分かったユリアは無茶をするんだろっとなあと内心
ため息をついた。

2人とも忘れ物が無いか確認し終えると、ブーツのつま先で地面を
トントンと蹴って足の位置を調整してから外に出る。

5人の家の前には既に軍への志願者が押し込められているであろう、
窓も無い頑丈そうな護送車があり、ギルバートと剛毅が乗り込むの
を待っていた。

「志願者のゴウキ・アカシバとギルバート・アンダーソンだな。私
はライアン・カーター軍曹だ。君たちを第二アメリカ合衆国軍陸軍
第3軍第3軍団第999独立特殊兵旅団独立大隊一突撃>アタック
<中隊訓練生として歓迎する。なお、訓練終了後に正式な配属先及
び、階級章が贈られる。訓練の結果次第で配属先と階級が決定され
るため、両名とも最善を尽くせ。……家族との別れが終わり次第、
速やかに車両後方部の扉より搭乗せよ。」

軍曹の階級章を軍の制服に着用している男は、剛毅とギルバートの
配属先を述べると、最後に剛毅達2人の後ろにいる3人を見て、別
れを済ますように言々と車両に乗り込んだ。

「「じゃあ行ってくるわ」」

2人はちらりとだけ3人の方を見て、それだけ言々と車両の方へと
歩き始める。

「待て」

コンクリートの上に転がった砂利が踏まれて地面とこすれ合う音が響き、ティードが声を発した。

「2人のことは俺が守ってやる。お前たちは自分のことだけを心配している。……気をつけるよ」

まさかティードから心配するような言葉がかかるとは思ってもしなかった剛毅とギルバートは顔を見合わせて、そして笑った。

「ハツハツハ！まさかティードに心配されるとはなあ。んじゃせいぜいくたばらねえように頑張るとするわな。しばらくの間2人のこと頼んだぞ！」

「笑うな、さつさで行ってこい。バカめ」

笑われたのが少し恥ずかしいのか、ティードはよその方向を見つつ追い払うように手ふると、先に家の中へと戻っていった。

「さて、それじゃ名残惜しいがしばらくの間さよならだ。元気でな！」

「戻ってきたら皆でパーティな！いつてくる！」

剛毅とギルバートは手を振ったあと車両後部にある扉を開けて車の中へと乗り込んだ。

車両は2人が乗り込んだのを確認すると、キーを回し、エンジンを始動させると勢いよく町のメインストリートを南下していった。

「なあなあ！あんたも軍属選んだ口かい？俺も軍属選んだんだけどよ、なんか不安なんだよねえ。正直俺らなんて使い回しの使い捨て兵士扱いなんだろうしよ、ぶっちゃけ待遇がいいなんて嘘って思わね？」

車に乗り込んでしばらくすると、剛毅達に話しかけたそうにそわそわしてた男がついに剛毅達の方へと話しかけてきた。

ギルバートは関わり合いになるのがイヤなのか、だんまりを決め込んでいるが、剛毅はどうせしばらく車内で一緒にいるのだからとそれに応じてみることにする。

「まあ嘘だとは思っけどな。それでもやらないよりはマシだろ。連中個人個人がどう考えてるなんてわからないけど、大多数は俺らアビリターのこと嫌ってんだから厚遇を期待するなんてバカのことだろ」

「たしかにたしかに。でもさ、俺らの上官になるのってたぶん軍務に慣れた一般の、あぁつまり『能力が無い』って意味ね、軍人だろ？ってことはよ、そいつさえ操れるようになったら金も飯ももらえるわ樂できるわでいいことづくめじゃん？あんたらも一緒にそうしね？」

自分の能力に頼り切っている頭の中身が軽そうな男が誘いの言葉を受けて、同乗している他の奴らを見ると、全員がそれとなく剛毅達の方に注目しているのが分かる。

恐らくは他の奴らは全員この男と同じ考えなのだろうと思うと、剛毅は先が思いやられるようで、頭が痛くなりそうだった。

（こいつら……本当にバカだろ。軍人ならそんなことを考える奴がでることぐらい気づくだろうし、そもそも簡単にやられるような人間を俺たちの上官としてよこすはずがない。こいつらといたって徳をすることはないだろうな。バカそうだし……。まあとりあえず面倒にならないように話だけ合わせておくか……）

「そうだな……。まあまだ色々分からないことだらけだから考えておくよ。ところでアンタ、名前は？」

内心で目の前にいる男たちに対する評価を下げつつ、とりあえず適当に話を濁しておき、話題を変えるために目の前の男の名前を尋ねる。

「お？俺の名前か？俺の名前はリチャード・ブラウン。あだ名はディックだ。今後ともよろしく頼むぜえ？」

「ああお互い死なない程度に頑張るとしようか」

（へえ、ディックね。ディック……ね。ハハッ。お似合いの名前だな、Mr・ディック）

内心でリチャードのあだ名のディックと、英語でスラングとして使われるディックとを合わせて、リチャードのことをMr・ディックと覚えておこうと決めた剛毅だった。

「おい、剛毅。あの馬鹿にはあまり関わるなよ。ああいう手合いはどうせ勝手に自滅していくから放っておけ」

「分かってる。俺はわざわざ沈没すると分かかって乗船するような

馬鹿じゃないさ」

リチャードと話していた剛毅を見て一応注意をしておこうと思ったのか、ギルバートが注意してきたが、剛毅が言葉を返すと、それを聞いて可笑しそうに口元を歪ませた。

それからあとはMr. ディックことリチャード達が馬鹿話をするのを聞き流しながら、いつのまにか眠りに入っていたギルバートの隣で、剛毅はようやく自分も眠りに就いたのだった。

車が止まって、エンジンによる車体の振動を感じなくなった剛毅とギルバートは自然と目を覚ました。

地面が砂利道になっているのか、運転席から降りたカーター軍曹が砂利を踏みしめながら近づいてくる音が聞こえてくる。

扉の前で立ち止まったカーター軍曹は誰かと話しているらしいが、車両の扉越しの剛毅達には話しているのが分かるぐらいの小さな声しか届かない。

しばらく待っていると、目の前で壁に寄り掛かって寝ていたリチャードが目を覚まし、周りで寝ていた取り巻き連中も目を覚まし始めたところによりやく話し終えたらしく、すぐわきの扉があいた。

「すまない、諸君。少々待たせてしまった。ここが本日より諸君らが汗水を流し、寝食を共に過ごすことになる場所だ。施設名は『第3特殊兵訓練場』だ。まず、これから君たちには施設の説明を受けてもらふことになる。こちらがこの後の説明を担当する、諸君らの教官となるデイヴィス・リベラ教官だ。彼は訳があつて前線には出ずに教導をしているが、つい最近までは海兵隊で任務に就き、死

地を潜り抜けてきた猛者だ。訓練は厳しいだろうが、苦境を乗り越えるほど生存率は上がる。各自精進せよ。…では、リベラ殿。引き継ぎをまかせます」

剛毅が車から降りて目の前にあったのは分厚い鉄で出来た門と、その左右にそびえる巨大な壁だった。

コンクリートで出来た分厚そうな壁の上には有刺鉄線が張り巡らされていて、侵入しようとする一切のモノを拒絶しようとしているようだ。

格子状の鉄の門の向こうには訓練場と思わしき広大なスペースと、訓練施設、それらに加えて宿舎のようなものも剛毅の目に映った。

説明を終えたカーター軍曹は、分厚い書類といくつかのリングファイルを引き継ぎのデイヴィス・リベラ教導官に手渡すと車の運転席の方へと引き換えしていった。

そのまま車のエンジンをかけたカーター軍曹は軍用車特有の力強いエンジン音を響かせながら元来た道とは別の道に進んでいった。

006 To the world of military (後書き)

すいません、今回はちょっと短くなっています。

どうもうまい区切りどころがなかったので、躊躇半端な長さになってしまいました。ここで区切らせていただきました。

現時点でユニーク49アクセスありがとうございます。これとは別アカで書いていた時よりはだいぶ少なくなってしまったので、多少寂寥感がありますが、それでも読んでくれる方がいて嬉しい限りです。

次話までがだいたい序章となるつもりです。

もしかしたら次話も短くなるかもしれません…。

ですが、その次からは本格的なストーリーに入っていくつもりですので、少々お待ちを^^;;

007 Beginning of military life

「ようこそ諸君。ここは数年前まで陸軍の一般兵用訓練施設だったが、君たちを軍に迎えるにあたって改装されたばかりの場所だ。君たちの扱いは世間ではとてもいい物とは言えないが、内装はきれいになっているので安心して訓練に励んでくれ。もちろんココをずっときれいなまま使えるかどうかは君たち次第なので訓練と同じく掃除にも励んでくれ」

最近まで現役の軍人だったというデイヴィスの体は浅黒く日焼けしたガツシリとした体格で、訓練と戦場で鍛え上げられた鋼のような筋肉が服の上からでも分かるようだった。

デイヴィスの顔には頬骨のあたりに銃弾がかすったような鋭い傷が残っているが、にこやかな表情なのでおよそ厳しそうな教導官といった風ではない。

年齢も20代後半といった感じで教導官として教える立場につくような感じには思えなかった。

そのためにリチャードとその取り巻き達がちよろそうだと思っただちに後悔することになるのはそう遠い未来ではない。

「さて、いつまでも門前で立ち話というのもなんだろう。ひとまずは訓練場の中の広場に入ってから点呼にするとしよう。さあついてきたまえ」

そついつて背を向けたデイヴィスは門の傍にあった通用口の扉を開けて、訓練場の中へと入っていった。

剛毅たちはそのあとに続いて中へと入り、デイヴィスの後ろをカルガモの親子のようにひよこひよこついていく。

いくら剛毅を除く他の者たちが早熟な人種といっても、デイヴィス

は190?OVERの身長に、ガツチリとした筋肉を持つ巨漢でそのシルエットは比べるまでもない。

訓練場内の広場についたデイヴィスはそれぞれにまとまっていた剛毅たちに、今から行う点呼順に並ぶように言うと、点呼を始めた。

「よし、ちゃんと全員そろっているな。まだ各々の適正を見ていないので本日はここににいるのメンバーで一夜を過ごしてもらうことになる。後日の訓練で適正を見た後は、まだ出会っていない他の組の者とそれぞれで分隊を組んでもらうことになる。さて、諸君らはこれより施設の案内を受けた後、夕食を取り、翌日から始まる訓練に備えて早めの就寝とするが、何か質問があれば受け付ける。……本日は大目に見るが、翌日からは姿勢には気をつける」

デイヴィスは休めの姿勢で背筋を伸ばして屹立しているが、そのデイヴィスの前で並ぶ剛毅たちのほとんどが崩れた姿勢で話を聞いているの見て、デイヴィスは最後にそう付け加えた。

その言葉を聞いたからと言って、すぐに姿勢を直すような真面目な者はいなかったが、特に質問が返ってくることはなかったので、デイヴィスは話を進めることにする。

「……ではこれより各自の荷物を宿舎に置いた後施設案内を始める。ついてこい。」

施設の中は実に様々な物がそろっていた。

実際に持ち上げられるような人がいるかも疑わしいような400?の重さまであるバーベルや、同じように負荷が通常よりも高く設定されているトレーニングマシンの他、アビリターの能力にも対応できるような高負荷の器具が数多く置かれている。

それらが置かれたトレーニング室の他には、銃器保管庫、弾薬保管

庫、携帯通信機器保管庫、特殊車両保管庫、管制室、道場、多目的ホール、講堂、食堂、宿舎、射撃場、グラウンドなど実に様々な施設が詰め込まれ、訓練場というよりも一つの軍事基地という様相を見せている。

施設の紹介と、施設の使い方をレクチャーしてもらった後は、剛毅たちは宿舎の方へと戻り、夕食までの時間を自由に過ごすことになった。

自由時間といっても、夕食までの時間は小一時間といったところで、後日部屋替えがあるということではほとんどのものが荷解きもせずに宿舎のロビーでたむろしたり、休憩をとったりと自由に過ごしている。

部屋自体はそれほど大きくはないが、部隊の最小単位である『班』の4人がともに過ごす場所としては調度いいぐらいの大きさである。部屋の中は4人で使うことを前提に作られているらしく、2段重ねのベッドが部屋の左右に配され、中央に頑丈そうな実用重視の事務机と、隅に小さい冷蔵庫がドンと置かれているだけだ。

そのほかに無駄なものはなく、デイヴィスの言葉通り実にきれいなものだった。

シャワーや、トイレ、洗面所、キッチンといった水回りのモノは基本的に共用となっているようで、部屋を出て出入り口近くのロビーとは反対方向に進んだところに作られている。

キッチンを使うものがそうそういるようには見えないが、一応調理をするにあたって必要なものはそろっているらしく、調理器具でこまるということはないさそうだった。

宿舎内を見て回った剛毅とギルバートは、ロビーに行き、設置されている自販機から『ドクタ。ペツパ。』を買って飲んで話を始めた。

「今日はこの後飯食って就寝…。それで終わりか。」

「みたいだな。でも、思ってたのと全然違うな。俺はもつとこう…
なんだか使い古されてボロボロになったお下がりのような施設だと
ばかり思っていたんだが…」

ずいぶんと久しぶりに飲む味に満足しつつも、自分たちに対する待遇のよさに半ば困惑気味の剛毅。

「まあどうせ、俺らに従順にいてもらいたいからって理由じゃねえの？俺らは武器を持っていない丸腰状態でも能力つつー強力な兵器を持ってるからな」

それに答えるギルバートの反応は実に淡泊なものだった。

「ん〜…。それが現状一番考えられることか。なんにせよ、待遇がいいのは歓迎すべきことなんだけどな…。今までのアビリターとの扱いから変わりすぎていてなんか変な感じがするんだよなあ」

「施設は確かにいいものだけだよ。中で働く奴らがどうかは分からねえだろ。デイヴィス…だっけか？あれはまだ上等な部類だろうが、ほかにも教導官はいんだろ。そいつらがどうかによるな」

「…そうだな。全員が全員神父さんみたいに優しくはないってことだな。何が起るか分からない今は、油断しないに越したことはない…か」

剛毅は丁度飲み終わったばかりの空き缶を3mほど離れたゴミ箱の中に投げた。

クルクルと回りながら放物線を描く空き缶は、ゴミ箱のふちギリギリに当たり、うるさい音を立ててゴミ箱の外側に落ちた。

剛毅は空き缶が落ちる音を聞いて拾いに行こうと席を立つたところで、剛毅の席の前の机に、ゴミ箱の傍に落ちたはずの空き缶が置かれた。

「やあ、惜しいね。もう少しで入るところだったんだけどね」

「ん、ああ…悪いな、拾ってくれたのか」

「いやいや、感謝することはないさ。なにせ僕は拾ってゴミ箱にそのまま入れればいいのに、わざわざ君の所に持ってきたような奴だからね」

そついうと男は余っていた席におもむろに腰を下ろした。

「まあまあ、そう警戒しないでよ。正直に言うとな、君たちに興味が湧いたんだ。だってさ、周りの奴らなんてアウトロー気取りでほぼ面晒すような奴ばかりだと思ってたら、渋い顔をしてドクペを飲んでるやつが二人もいるんだからね。いい意味で裏切られた気分ですつい話しかけてみたくなっただ」

馴れ馴れしいその態度に剛毅は訝しげな視線を送るが、席に座ったその男は楽しそうに顔に笑みを浮かべたまま話を続ける。

「君たちはなんだか周りの奴らと比べて…うん、そうだな…。冷静…いや、達観かな？しているような気がするんだよね。君たちのところでもあったとは思うけど、『俺たちがココをシメるんだ！』みたいな考えをいうやつがいてね。年代的なものもあるんだろうけど、いかにもアウトロー気取りでバカらしい考えだよ。そんな奴らにシメられるような甘いやつらが僕たちの教官になるわけがないのね。まあ他にもいろいろ細かいことはあるけど、そんなことがあ

「つたから余計に君たちに興味が湧いたんだ。いきなり話しかけて悪かったね。ついつい自分の好奇心を優先するのが僕の悪いところなんだ」

剛毅は目の前で楽しそうにしゃべる男を改めてよく見てみた。

男のクセっ気のあるくすんだような金髪は黒いゴムで無造作に後ろで一つにまとめられていて、碧眼の細い目元には黒フレームのスクエア型のメガネが乗っている。

体格は痩せ型だが、筋肉はある程度ついているらしいので、それほど貧弱そうという感じではなさそうに見える。

（調子のいいただのバカってわけじゃなさそうだ……。どことなく掴みどころがないような感じはするけど、頭は悪いわけじゃないだろうし、俺たちに特に害はなさそうかな）

剛毅は頭の中でまだ名前も知らない目の前の男についてそう評価を下しつつ、自分の隣に座っているギルバートをちらりと横目で見てみた。

ギルバートは男に興味をもったのか缶に残っているジュースを飲みつつも、その眼は目の前にいる男の方へと向けられている。

「…まあ確かに、バカそうな奴らが多いのは事実だよな。でもよ、自分のことを名乗らないで話をするっていうのもどうなんだ？俺からすればマナーのなってないガキにしかうつらねえぞ？」

ジュースを飲み終えたらしいギルバートは安っぽい白色の天板に空き缶を置いて、腕を組みつつ声を発した。

「ああ失礼。すっかり忘れていたよ。僕の名前はアルフォンス・エ

ンフィールドだよ。出身はニューヨークウェストチエスター南部のスカースデール。能力は…まあお互いのためにも秘密ってことで」

「金髪碧眼にその名前の響き…。もしかしてアングロサクソン系のアメリカ人か？」

「そうだよ、よくわかったね。金髪碧眼だから珍しがられるけど、一発であてる人は数少ないんだけどねえ」

「いや、ずっと前知り合いに同じような奴がいたからってだけだ。ほとんどあてずっぱうだから気にするな。…それにしてもスカースデールか。たしか、スカースデールは金持ちばかりが集まる高級住宅街じゃなかったか？あそこが出身ってことは金持ちの家の出だろう。なんでまたこんなところに？あんなところに住めるぐらいなら『許可料』払って『特別許可』をもらってもおつりがくるだろう。」

ギルバートがそう聞くと、アルフォンスは苦笑を浮かべて答える。

「ハハハ、まあうちの家は元々の家柄が良くて裕福な家庭だったんだけど。その分血筋を尊ぶとでもいうのかな。忌まわしい能力を持つて生まれた僕は家の中では爪はじき者でね。僕にはすでに兄がいて、兄が家を継ぐことになっていたから僕はちょうど厄介払いって形でこの町に連行されてきたのさ。まあ連行って言っても高額納税者の手前で薬を打って乱暴につれてこられたわけじゃないんだけどね。」

「…悪かったな。いやなこと聞いちまって」

ギルバートが少し申し訳なさそうにアルフォンスに向かって頭を下げるが、アルフォンスはそれを押しとどめた。

「いやいやいや、とんでもない！僕はこれでもせいせいしているんだ。居心地の悪い家から解放されたばかりか、自由に生きることができるようになったからね。もちろん、元の暮らしからすると金銭面で苦労することはあるけど、元の暮らしと比べると雲泥の差さ。雁字搦めで灰色の生活が一気に様々な色彩を帯びたぐらいにね。だから君が頭を下げる必要はないよ」

「…そうか。遅れたが、俺からも自己紹介をさせてもらう。ギルバート・アンダーソンだ。出身は旧ニューヨーク市街近くのスラムだ。汗と泥と血にまみれて生きてきたからたいいていの荒事ならなんでもござれだ。よろしくな」

ギルバートは自己紹介を終えると、組んでいた腕をといてアルフォンスに向かって右手を差し出した。

アルフォンスも右手を出してギルバートとしっかりと握手を交わすと、よろしくと言葉を発した。

「俺は赤司波剛毅。日本うまれだから、赤司波がフォミリーネームで、ファーストネームが剛毅だ。出身はギルバートと同じでスラムしばらく軍に属する者同士、仲よくしよう」

こちらもギルバートと同様にアルフォンスに右手を差し出して、お互いに握手を交わす。

それぞれが自己紹介をし終わった後は、三人は互いの能力に関することにはなるべく干渉しないようにしつつ、様々な雑談を交わして就寝時刻までの時間を楽しくすごした。

007 Beginning of military life (後書き)

一応年内に第二章突入です。これからはもうちょっとアクションが起るようになるかな？

とりあえず第二章の最初ということで軽く進めることにしました。いきなり殴り合いでもよかったのですが、ちょっと疲れるかなと思っただのでこのように。

次話からは訓練をいれるのですが、軍隊の訓練などは想像でしかわからないので、変なところが結構でてるかもしれません。

そこらへんはどうかご容赦を…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7462y/>

Burn the blood! ~その血を燃やせ! ~

2011年12月25日16時54分発行